

学校経営推進費 評価報告書（最終）

1. 事業計画の概要

学校名	大阪府立堺支援学校		
取り組む課題	児童生徒の自立支援 児童生徒の学力の充実		
評価指標	1 視線入力装置を扱える教員数の向上。 2 視線入力装置を用いたアセスメントの活用率の向上。 3 児童生徒の発達を支援する学習ツールとしての活用率の向上	⇒	① 視線とパソコンの連動性の認知 ② 視線入力とパソコン画面（ソフト）の関連性の認知 ③ 意思伝達可能児の発掘・育成等
計画名	「重度肢体不自由（発話が困難）の視線入力装置を活用したアセスメントの充実とコミュニケーション力の向上」		

2. 事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	1 教職員の資質向上を基とした学校力向上 (1) 児童生徒が有する力の客観的評価と、それに基づく指導体制の構築。 ウ 視線入力システム導入による、児童生徒のコミュニケーション力向上への取り組み。 ※教育環境の改善を試みると共に、視線入力システムによる指導プログラムを作成する。
事業目標	1 視線入力装置を児童生徒のアセスメント（視野・眼球運動等）に活用することで、本校の自立活動領域のアセスメントでの課題の検証に活かし、実態に応じた合理的配慮を整え、適切な指導を行う。 2 視線入力装置の仕組みや使い方を学び、学習ツールとして活用することで、自己表現力を育み、コミュニケーション力を向上させ、将来の自立と社会参加に向けた学びの充実に図る。
整備した 設備・物品	視線入力装置一式 ノートパソコン：Windows10 Pro (i5/8GB/500GB) (3) 視線検出装置：tobii PC Eye Mini (3) 視線入力ソフト：tobii communicator 5 (1) 視線分析ソフト：tobii Gaze Viewer (3) ノートパソコン用固定具：パソッテルH型ノートPC用Bタイプ (3) 外部コール：Eye コール (3)
取組みの 主担・実施者	主 担： 視線入力活用機器推進プロジェクト（指導教諭1名、リーディングスタッフ1名、自立活動専任スタッフ3名、自立活動分掌部員1名） 実施者： 全教員の6割程度（学習ツール活用率）9割程度（アセスメント活用率）を予定
本年度の 取組内容	(環境整備) ・ 視線入力装置にソフトを追加し、対象児童生徒の実態に応じた効果的な指導ができるように整えた。 【追加ソフト】Drop Talk Windows版 Miyasuku EyeCon LT2 〈校内支援・研修〉

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視線機器の専門スタッフによる研修で視線入力ソフト（センサリーアイ・ゲイズビューワ）の使い方を学んだ後、活用事例を基にソフトを活用した視線履歴によるアセスメントの助言を受けた。 ・ スーパーバイザーによる授業支援及び ICT 研修を行った。 ・ 教職員へアセスメントに向けての活用支援。 ・ 「視線入力サポートタイム」を設け、視線入力装置を活用した相談日を設定した。 ・ 訪問籍の児童生徒は対象がなかったので実施しなかった。 ・ 情報処理部主催の「ICT 機器見本市」の研修で視線入力装置を担当し、自立活動部と連携してワークショップを実施した。 ・ オンラインで、社会福祉法人日本肢体不自由児協会が主催する『肢体不自由のある子どもの Windows と iPad os 活用講習会 1』に、自立活動部部員が参加し、視線入力装置に関わる教員に情報の提供を行った。 <p>〈保護者への発信〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ブログで視線入力装置の活用事例を保護者に発信した。 <p>〈地域支援〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 堺市立重症心身障がい者（児）支援センター『ベルデさかい』の作業療法士等の職員へ視線入力装置の使用方法について研修を行った。 <p>（その他）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 情報処理部と自立活動部の両分掌間で視線入力装置の情報共有と研修会を行った。
<p>成果の検証方法 と評価指標</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 視線入力装置を扱える教職員を 40%以上にする。 2 視線入力装置を用いたアセスメントの活用を対象児童生徒への 90%をめざす。 3 視線入力装置を用いた学習ツールとしての活用率、対象児童生徒の 29%。 ①視線と連動性の認知 ②視線入力と PC 画面（ソフト）の関連性の認知 ③対象児童生徒の意思伝達能力を評価し、その能力の向上を図る（3-①80% 3-②38% 3-③12%）
<p>自己評価</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 今年度は、新型コロナウイルスの感染予防のために計画していた研修は感染予防に配慮し、人数制限等を行ったが、予定していた研修は実施できた。視線入力を扱える教職員は、未経験の教員と一緒に授業を行うことで直接支援し、視線入力装置を扱える教員数を増やすことができた。しかし、感染予防に配慮したことで研修等への参加者が少なくなり、新転任の教員に周知できなかったことや扱える教員の転勤等で視線入力を扱える教員数が減る結果となった。 （目標 40% > 達成 24%）……………（△） 2 年度当初に視線入力によるアセスメントの希望調査を行ったことで、高等部の生活課程の生徒数が増えた。しかし、対象児童生徒の半数が昨年度からの継続であるために、新規アセスメントの数が伸びなかった。 （目標 90% > 達成 39%）……………（△） 3 学習ツールとしての活用は、19 人で 61%であった。3 年間アセスメントのみ行った児童生徒数も対象児童生徒としてカウント（分母数にいていた）してきたが、今年度は、授業として継続した児童生徒数を分母として計算した。結果、①視線とパソコンの連動性の認知②視線入力とパソコン画面（ソフト）の関連性の認知③意思伝達可能児の発掘・育成等の目標は、下記結果となった。 …………… 3-①79%（△） 3-②42%（○） 3-③16%（◎）
<p>事業のまとめ</p>	<p>事業目標の「視線入力装置を活用し児童生徒の視野や眼球運動のアセスメントを行う」は達成できた。主として自立活動の時間に取り組んでいる児童生徒が多いが、アセスメントの結果を、他の授業の教材の提示等において実態に応じた配慮を行うのに役立てることができた。今後も、視線入力装置をアセスメントとして活用することで、授業だけでなく学校生活を豊かに安心して過ごせるようにするための支援機器として活用していきたい。</p> <p>2つめの事業目標「学習ツールとしての活用」については個々の「見る力の段階」に応じた練習用ゲーム等を活用して、見る力の向上を目標に取り組んだ。その結果、今まで写真カード</p>

の選択ができなかった児童ができるようになったり、日常生活の中で意思表示ができるようになったりする結果を生むことができた。文字によるコミュニケーション機器として活用するにはまだまだ時間がかかる。文字の理解や、他者とコミュニケーションを図る意欲、必要性なども大きな一因となるからである。現在は、本校の児童生徒の実態に即した「DropTalk」というソフトを活用して、教員が個々の児童生徒の実態に応じたキャンパスを作成し、自己決定や意思表示の学習に役立てている。視線入力装置の活用は今後も“アセスメント”や“見る力の向上”が中心となっていくと思われる。その中で児童生徒の成長に結びつくような支援を行っていくことが大切である。

視線入力装置を活用した学習の対象児童生徒数は、全校から見れば少ないが、対象となった児童生徒において確実にそれぞれの目標に応じた成果を出しつつある。次年度からも、視線入力装置の活用を継続して進めるためには、自立活動部と情報処理部が連携して取り組むことが必要であり、視線入力装置を扱える教員数を維持または増やしていくことが大きな課題である。

3. 事業費報告

今年度事業費総額	40,000	円
----------	--------	---

積算内訳

* 決算科目（節）を明示し、節毎に積算内訳を記載すること。

科目（節）	番号	内訳	単価	数量	金額
1 報償費	1	スーパーバイザー講師謝礼金	¥40,000	1	¥40,000
	2				
	3				
					小計
2 旅費	1				
	2				
	3				
					小計
3 消耗需用費	1				
	2				
	3				
					小計
4 維持需用費	1				
	2				
	3				
					小計
5 役務費	1				
	2				
	3				
					小計
6 委託料	1				
	2				
	3				
					小計
7 使用料 及び賃借料	1				
	2				
	3				
					小計
8 備品購入費	1				
	2				
	3				
					小計
9 工事請負費	1				
	2				
	3				
					小計
10 負担金・補助 及び交付金	1				
	2				
	3				
					小計
				合計	¥40,000